

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第16回】

宮崎恒二

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)

「ジャワ人」と呼ばれる人々

マレーシアで、ときおり「あの人は『ジャワ人』だ」とか、「このあたりには『ジャワ人』がたくさんいる」というようなことばを耳にすることがある。ここでいう「ジャワ人」とは、マレー人の中で、ジャワから移り住んだ人々あるいはその子孫を指す。マレーシアに居住して数世代を経ると、ジャワ語も忘れられ、「マレー人」となってしまうことも多いので、「ジャワ人」の範囲も、数も明らかではない。

ただ、「あの人はジャワ人だ」という表現には、なにかしら特別視するニュアンス、主流から外れた人々、といった意味が含まれる。「ジャワ人」を特別視される一つの理由は、彼らが強力な呪術を持つというイメージでとらえられているためである。とりわけ、ジョホールやスランゴールでは、ボモあるい

る。マレー人にとっては、イスラムの教えが金科玉条になりながらも、生活の一部でもあった呪術を、完全に払拭するにはいたらなかったのだろう。

さて、「ジャワ人」たちの多く

は、二十世紀初頭以降、イギリス植民地政庁は、農地開発のために導入された労働者の子孫である。数年の契約労働を終えた後、出身地に戻るものもあつたが、一部は引き続きマレー半島に残り、処女地を開墾して、そのまま住み着いた。出稼ぎの理由は、故郷のジャワでの貧困が第一に挙げられるが、政治的弾圧を逃れる、あるいはメッカへの巡礼への費用を蓄えるという希望もあつたようだ。

きわめて純粋な信仰上の理由であつたとすれば、住み着いた先で担わされる、いわば「異端」の役割は皮肉としかいいようがない。

呪術で知られる「ジャワ人」だが、彼ら自身は、先祖から伝えられてきた知識が失われいくなか、呪術の専門家というイメージを脱却し、「ジャワ人」としての出自を消し去っていくのか、あるいは、生業の一つとしての呪術を保持していくのか、選択を迫られてきている。



ジャワ人の伝統舞踊(ジョホールで筆者写す)

岐路に立つマレーシアのジャワ人 呪術の伝統守るか、マレー人に同化か

はドゥクンと呼ばれる呪術師は「ジャワ人」であることが多い。これらの地域には、確かに「ジャワ人」が多く居住している村が多い。

筆者がかつて訪ねたジョホールの村では、その住民の7、8割が「ジャワ人」であり、日常的にも、マレー語とは異なるジャワ語が用いられていた。かれらは、自分たちが特に呪力をもっているとは考えていないが、一部の人々は先祖から伝えられた呪術の知識をまだ記憶している。たとえば、マレーシアにはないジャワ暦を用いた運勢占いや、ジャムウと呼ばれる生薬の知識などだ。

19世紀末に書かれたスキートの『マレーの呪術』には、同じような知識が記録されているので、かつては、呪術の知識も「ジャワ人」の専売特許ではなかったはずだ。しかし、おそらくは、マレー人の間では、イスラミックな考え方の浸透によって、こうした呪術には直接関わりたくない、という意識が強くなり、その役割を新参者のムスリムである「ジャワ人」が担うようになったのではないかと考えられ

【執筆者プロフィール】1952年愛媛県生まれ。ライデン大学にて博士号取得。専門は文化人類学。インドネシア、マレーシアを中心に、民間信仰、移民について研究。著作に「ジャワ系マレー人とその『知識資源』」(クリスチャン・ダニエルス(編)『知識資源の陰と陽』(総合編集:内堀基光『資源人類学』第三巻)東京:弘文堂,pp.73-92.2007)、『アジア読本:インドネシア』(山下晋司、伊藤真との共編)東京:河出書房新社、1993など